

◆斎藤 主（69歳）

学徒出陣との出会い

戦場・軍隊 ●

太平洋戦争の敗色の濃くなった終戦前の二年間は、日本が国の存亡を賭けた断末魔ともいえる悲惨な戦いであった。諸戦のハワイやマレー沖海戦の勝利から、ガダルカナル・ミッドウエーの海戦・航空戦の敗退後、たちまち戦勢は逆転、戦況は悪化の一途をたどった。

私は、そのころ（昭和十八年九月）、東京の師範学校を半年繰り上げ卒業となった。すでに教員の短期現役制度は廃止され、在学生の徴兵猶予制度もこの年から打ち切られた。この年六月、閣議で「学徒戦時動員体制確立要項」が決定されていて、十月二十一日には、神宮外苑で東條首相臨席のもと、学徒出陣式が盛大に行われた。これまで温存されてきた兵力として、大学・高等・専門学校学徒の徴兵延期中の者、徴兵期の卒業生のすべて約十四万人が一挙に徴兵され、劣勢にあえぐ戦況を挽回（ばんくわん）するため戦列に加わり、祖国防衛の任に当たることになった。まさに有史以来の国難と、時の学徒の運命的な出会いである。この措置は昭和十九年も続けられ、徴兵年齢も一年下げられて、更に多くの学徒が出陣した。学

問も職業も人生設計もお預けにして戦線に赴いた。

この出陣と合わせて、航空戦時代を迎えた。陸海軍は、航空兵力の増強を優先、緊急策として大量の航空兵と共に大量の指揮官搭乗員を速成して、迫り来る決戦と国土の防衛に備えるため、軍の飛行科の学生を大募集した。兵役の進路をわずかながら自主的に選べるため、数万の学生が応募、受験した。

一年間在学徴兵延期をしていた私は、普通の入営を待たず海軍飛行科予備学生の進路を選択した。それは、最も確実な死への近道であり、兄を比島の戦場へ送っている父母の説得には難儀した。人は誰も、自分の都合のよい時代や社会を選んで生をうけることはできない。国家が危急存亡に瀕（ひん）しているとき、愛する同胞、愛する祖国、国土の防衛に、国法に従って身命を捧げることは、当然の義務であった。すでに十余年、アジアの解放や共栄を目指して戦ってきた国民や多くの犠牲者たちの歴史は重く、自己中心の「自由」や「人権」をふりかざし先人を冒瀆（もうとく）することは許されなかった。

学徒出陣式に先立つこと一か月、九月中旬、学徒出陣の第一陣として土浦海軍航空隊に入隊した。学校の壮行会、下宿している家や町会の壮行会があり、上野まで恩師や級友に送られ、「祈武運長久」の寄書きの日の丸二枚を櫛掛けにして勇ましく出発した。恩師や友人とも二度と会わぬ、生還を期さない悲壮な旅立ちであった。

入隊すると、連日のように適性・能力を調査するための諸検査・テストと共に、一刻を惜しむかのように猛訓練が始まった。

第二陣は十二月一日陸軍入営、第三陣は十二月十日海軍入団で、該当する男子学徒の全員が出陣した。二・三陣の師範学校の級友は、十月から指定の小学校に赴任し、子供たちと出会い、待望の教壇に二か月間立つことができた。短期間の教え子たちに送られて出征したが、出会ってすぐ「先生を戦場に送る」子供たちは、惜別の「万歳」に泣いたという。

私たち、九月の第一陣は、卒業式にも出席できず、奉職を決められていた小学校にも空赴任で、あいさつの訪問もできなかった。教師への希望に燃えて五年半も一筋に学んできて、一度も教壇に立つことなく南海の空に果てる運命のいたずらを恨んでみたりした。

第一陣の九月、海軍航空隊入隊の飛行科の同期生は約五千人で、基礎教程で操縦・偵察に分けられ、私は操縦員として、中間練習機教程で更に艦上爆撃機に機種を決められ、実用教程に進み、昼夜にわたる猛訓練が続き平時なら三年はかかる

教程を一年に凝縮されて速成された。さすがに栄養や健康管理は合理的であった。それでも過労で倒れ、訓練中の事故が続出し、犠牲者も少なくなかった。

教程終了後、昭和十九年九月、すでに攻防戦の真只中の比島や比島を攻撃圏とする台湾、九州の前線基地へ一斉に出陣していった。私は、次期予備学生の特攻教官として原隊に残った。比島からの同期生の特攻戦死の報が続々と入った。十九年十一月からは、奪還されたサイパン・テニアン・グアムの米軍基地の整備が進み、大都市と軍事基地、工場地域の上空襲が反復され、大被害が重なり本土も戦場となった。毎回の五百機以上のB29爆撃機の迎撃でも多くの同期生が戦死した。

昭和二十年四月、米軍の沖縄上陸を阻止する航空総攻撃は十回にわたったが、その特攻隊の指揮官機で突入した同期生は四百名を超え、各戦闘合わせて入隊同期生の二千六百名以上の優れた人材の尊い犠牲者が出た。

◆斎藤 主（69歳）

特別攻撃隊との出会い

戦場・軍隊 ●

昭和十九年夏、学徒出陣の軍の学生は、各教程を終了し、実戦部隊に配属された。私は、海兵・次期予備学生の艦上爆撃機（急降下爆撃専門）の実用機操縦教官として、百里が原の原隊に残された。

昭和二十年三月、沖繩をめざす雲霞（うんか）のような米機動部隊の大軍に特別攻撃が続いていたが、ついに四月上陸が始まり、上陸部隊、機動部隊に対する航空総攻撃が始まり十回に及んだ。いよいよ時来たり、私達操縦教官を中心に第一次特別攻撃隊が編成され、艦爆十二機で九州の特攻基地に一気に飛んだ。各地から特攻機が続々と集合し、まさに「兵馬倥傯（へいばこうぜん）」の状態であった。出撃日の六日早朝、朝食もそこそこに隊外の宿舎から集合しトラックに立乗りで基地に行く。九州の春は早く、山も畑も緑が濃く桜は葉桜、八重桜が満開で美しい。すべて見納めである。沿道の住民が、八重桜の花枝を特攻機に飾って飛ぶようにと各隊員に配ってくれる。花を受けると隊員の笑顔は明るく喜びに満ちている。

基地では、五百キロの爆弾を固着した特攻機が整備完了で

待っていた。エプロンから次々と発進する。滑走路のない土と草の凸凹の多い飛行場を、重い爆弾を抱えてエンジンを吹かしてゆらゆらと進む。滑走距離を十分とるために飛行場の最西端へ行き、地上で編隊を作り一斉離陸の態勢を整える。隊長機の発進の合図で各機一斉にエンジン全開で動き出す。

ところが、私の小隊長の海兵出の中尉機と私の機はフル回転しても微動だもせず、全開しては絞るたびに機が傾いている。位置に付く最後に桜島に向けて百八十度回転したとき爆弾と機体の重みで脚が深く土にめり込み、初動が得られなくなっていた。他機は、大きくローリングしながらも滑走・離陸して鹿児島湾をはうように飛んでいる。遅れじと何度も試みるが全くだめである。中尉機からの合図で断念し、復旧した後から追うこととし、降りて司令部に駆け報告。「援護戦闘機なしの二機の昼間特攻は不可能、次期を待て」となり、待機に入る。離陸した十機は無事沖繩の戦場に到着、目標捕捉、突入を打電、突入中の発信音の消えるとともに休当り散華（さんけ）した。この大戦果は、味方の偵察機の写真報告でも証明さ

れた。先日まで学生の操縦訓練に一緒に取り組んできた、頑健で、優秀で、親しかった教官達が一回の攻撃で散華してしまった。

原隊百里原に飛んで帰り、新しい飛行機十機で新特攻隊を編成、隊長となり命を待った。

五月二十七日、海軍記念日を期して第八次特攻総攻撃に参加となり、再び九州の特攻基地に飛ぶ。今度は舗装の大滑走路があり、離陸は確実で、爆弾は八百キロ固着、片道燃料、黎明攻撃である。基地は慰問団でにぎわい、多くの女学生達が祈るように特攻機を撫でていた。自分の日の丸鉢巻きの大きな似顔絵を特攻機に乗せていってくれと隊員がせがまれ、私も数枚ありがたく引き受けた。機体の点検整備後、夜は作戦行動の徹底を図る。その日偵察機「彩雲」の撮ってきた戦場の写真を全紙に拡大して、濡れたまま卓上に貼り戦況確認、各機の突入目標を決め、発信、編隊行動、進路、戦闘機援護、無線封鎖と解除、突入方向などを確認する。電報に似た最後の手紙を隊員の親や家族に書く。明日の午前で、もうこの世にいない。先発の友とも沖縄の海で会う。夢の中で、学友、恩師、戦友、家族、故郷の生活などできるだけ多く会っておこうとあせりながら、しばしまどろむと起床である。暗闇の中で出撃の準備、簡単な儀式を済ませ一斉に自機にとび乗る。最後の援護戦闘機三機の離陸開始を確かめ「全機チョーク（車輪止）払え」を命じ離陸を待つて発進態勢に入る。そのとき、一機が離陸方向を調整しきれず私達の翼を接

して並ぶ列線に向け驚進してくる。飛び超えてくれと祈った瞬間、私の三番機に激突、火だるまとなって墜落、当てられた機も転倒大炎上、周囲の機も火をかぶる。攻撃中止を命じ全員できるだけ遠くへ退避させる。最悪の予想通り誘爆による大爆発が二回続き、火災がおさまってみると三機焼失、四機大破、死傷十数人であった。司令に報告後、事故処理を急ぎ、その夜は、死者の通夜で徹夜し、翌朝、茶毘、熱い遺骨をやけどしながら納め、輸送機で人が松山の海軍病院に依頼。再び原隊に飛び、その日のうちに無事の隊員を含め次の特攻隊を編成、三度九州へ飛び立とうとする時、夜間特攻に切り換え、技倆を上げて待て」となり、訓練中終戦を迎えた。



◆鈴木 義光（68歳）

つらかった中国での軍隊生活

戦場・軍隊 ●

昭和十八年二月十五日、前日からの送別会で二日酔いで頭がいたく目まいがするし、これが会社勤めなら休むところだが、そうはいかない。気分が悪いまま、朝五時に出発し、神明神社に参拝し、その時の父が挨拶をし、「今日只今陛下の赤子をお返し致します、云々」、この言葉が町内の皆さんに非常に感銘をあたえた。無事に入隊し、この朝、特に寒く、防火用水に張った氷が五、六センチあった。ただちに身体検査があり、素裸で営庭に並び、その寒さ、今だに忘れる事が出来ない。次は兵科の発表だ。都会の私達は街に馬とか牛がいると遠回りして通ったものだ。だから馬を扱う兵科に入らぬようにと歩兵一中隊から順次名前を呼ばれてくるが歩兵六中隊で終わり、次に機関銃中隊だが、これにも呼ばれない。次は歩兵砲中隊。三番目に名前を呼ばれた。アア最悪。一番心配していたとおり馬を扱う兵科に入った。

毎朝起きると、かけ足と行軍と決まっていた。編成されて、三月三十日深夜品川駅より出発する。行先は誰も知らない。着いたところ、門司港より釜山上陸し汽車でハルピンを経由して杭州に着く。

江蘇省南通県南通に大隊本部があり、ここで我々初年兵は教育を受ける。朝五時起床ラッパで飛び起きる。営庭に集合し、点呼を受ける。それが終わると、前日より決められた務めをする。馬舎掃除と馬の手入れ大隊砲の手入。室内掃除初年兵は皆手分けしてする。その忙しさは体験した者でなければ分からない。飯はかみかみすぐ服装を整え営庭に集合し、午前の演習が始まる。一般の歩兵の訓練と大隊砲の実弾演習、夏の訓練は特につらい。社会人ならば日中の仕事を終え、夜は冷えたビールで疲れもいやせるが軍隊というところはわがままが通らない、そこを我慢するから忍耐力が生まれて来るのではないかと思う。訓練期間中、耐えられなく自殺した者も数名いる。また、毎晩「ビンタ」がとぶが連帯責任上やむを得ない。夜の消燈ラッパを聞くと、ほんとうに涙が出てくる。ほとんどの諸兄も体験した事であろう。一期の検閲も無事に終わり、進級発表、我が仲間五十名の内十名が一ツ星から二ツ星になる。皆から羨望の目で見られるが、私個人内心では嬉しさをかくせない。早速故郷の両親に知らせる。まだ半人前の兵隊であるが、各警備隊に配属される。

初年兵は毎晩歩哨に立つ。十二時頃より二時間立哨する。我々の警備隊は真面目に歩哨に立った故に何事も無く三ヶ月は過ぎた。警備地交替で機関銃中隊と入れ替わって一週間目に全員玉碎する。何でも古兵ばかりで毎晩酒を飲み立哨しなかったようだ。我々の中支那での任務はちよど作戦が終わった後で、「清郷工作」といって、街の人々、町村の人々と暖い交流をし、相互信頼のおける環境作りをし、我々は良い結果を生み出した。

一年過ぎて小生は転属命令が出る。蘇州にある第六十師団司令部である。三月に大雪が降り上海駅のホームに五十センチぐらい積もっている。ただ一人蘇州に向かう。無事到着着任の挨拶をすませる。最初の任務は、衛兵専門で三日目ごとに交代勤務する。その時の中隊長とは今日なお親交を重ねている。半年して今度は師団長閣下の伝令として官邸勤務である。この勤めは後に終戦になってからも外の戦友には申し訳ないが物資共に恵まれた。

八月十五日玉音放送を拝聴、営庭で全員大粒の涙を流し、その夜は将校と兵隊共々喧々号々と……最後には皆自決しようとして話し合うが、前後するが終戦大詔の放送後は自決を覚悟されている師団長は、夜半一時頃に至って割腹寸前に副官に発見されて押し止められた。その手に持っていた短刀は関の孫六の銘刀である。小生が毎日のように手入れしていた短刀である。後に復員の時に湯恩伯將軍に贈呈した。

湯恩伯將軍は日本の陸士を出られたそう。私共は大変良くして頂いた。週一度は必ず色々な物（酒、タバコ、甘味、

果物、菓子類）を師団長はじめ我々にも品物を頂いた。ほんとうに感謝してる。

武装解除され、丸腰の我々に中国兵は拳銃をつきつけ、時計とか万年筆、ナイフを欲しがり全員が取られた。いよいよ復員が決定し、師団勤務の将兵は四日かけて蘇州より上海に集結命令、行軍して行く途中、付近の住民より靴とか水筒、着ている品までハギ取られそれはひどい姿で上海に着いたようだ。我々は残務整理して一ヶ月後に湯恩伯將軍の命令で特別列車を仕立ててくださる。米、みそ、乾パン、砂糖、その他もてるだけ汽車に積み込んだ。後に、この食糧も復員船で同行した。広東から来た将兵と合流して乗船したが大豆しかもっていないので我々が持っている食糧を全部出しておかゆにして食べた。上海より二月かけて博多港に入港したが、すでに何十隻もの船が沖に停泊している。検疫して伝染病の有無によって我々の船は何事もなく、直ちに上陸出来た。時に昭和二十一年六月七日であった。幸せである。

博多駅で師団長、参謀長、副官と我々十名、再会を誓い祖国復興に努力しなければならないと思う。直ちに上陸出来た。時に昭和二十一年六月七日であった。戦地での数々辛酸をなめて来たが、これからの内地での苦勞など、物の数でないといと我が心にいい聞かせる。

そして我が青春時代の三年四ヶ月を国家に捧げる。多くの戦病死諸氏の御冥福をお祈り申し上げる。

◆高橋 長敏（71歳）

忘れゆくときに

戦場・軍隊 ●

東部六二部隊に十六年の秋に入隊した。対戦車砲の教育を受け、代々木の練兵場や一ツ木通りによく演習に出た。

海軍は十二月にハワイを攻撃し、大東亜戦争に突入した。私の隊は翌年の四月に北支の済南に進駐した。陸軍はマレー半島を席卷し、シンガポールの攻略に向かっていった。マニラ、ジャカルタにも陸軍は進攻し、戦果をあげていた。自転車隊要員として私は各地を転戦したが青島、沂水、威海衛への魯東作戦は印象深い体験だった。海軍将校の叔父は言葉が通じなくとも誠意は通ずる、誰にも親切にすることだと言ってくれた。食糧も衣類も、男性も不足するなかで銃後では、国民は苦しい時を国家の方針に従ってこの大戦に協力していた。

泰安より黄河鉄橋警備隊に転じ、十八年春に魯中军区への作戦に参加した。秋には蘆溝橋のある長辛店に移り、そこで作戦準備をするようになった。北支全軍は十九年三月に華南省進攻のために進撃を開始し、湯恩伯七十六萬の大軍が待ち構えている火線を突破し、七旅団に続いて私たちは虎牢関よ

り黄河を渡河して鄭州になだれ込んだ。コレヒドールと洛陽の陥落はどちらが先かを私たちは言い合った。死を思い、死を忘れて戦かったが若者ばかりの生活は、愉快なことも多かった。テレビはなく、世界の情勢が瞬時に判断の基となるという時代ではなかったが、軍人は政治にかかわらず、ひたすら上官の命に従い、祖国の安泰を祈って戦った。鄭州では米軍機に、対空用重機で幾たびも射ち合った。これが私にとってのわずかな武勇伝と言えるかもしれない。中国人はこせつかず、物価があがって困ると言っていた。どれほど中国人に対して迷惑をかけたことか——痛恨の極みである。

秀嶺作戦が終ると二十年には転属されて装甲列車隊に移った。本隊の五九師団は北鮮に向かって出発した。独り残されて苦しんだが、後にこれが生還の基となった。津浦線と膠濟線の警備に当たったが、済南站で終戦を知ってから奥地から脱出する居留民の救援や輸送と雑軍の侵入を防ぎ、悪化する治安を直系軍に代わって防衛した。戦争は終わっていたが、日夜、路線の破壊と襲撃に対処しながら帰還命令を待つ

た。青島までの道のりはひどく長かった。よく盗賊に襲われたが敵対行為はとれなかった。何とも苦痛なことだったが、やがて私たちは青島に達し、集中營を出て乗船した。明日は佐世保に上陸できるという夜、静かな海上の漁火を眺め、斃れていった戦友を偲んだ。

故国の山は深い緑におおわれていて、それが眼にしみた。五年に近い野戦からの帰還を想うと、こみあげてくるものがあった。列車内では老婆より握り飯を頂いて、感謝とともにそれを食べた。屋根が燃え落ちた駅々を通過し、大阪で母に電報を打った。見る影もない東京に降り、焼野の赤坂を山王下に向かって歩いた。生家は瓦礫から判断することができた。生きるのだ、私は誰もいない焼土に立ってそう思った。

母の故里である茨城県の北にそれから向かった。上野駅には孤児が大勢たむろしていて、帰還兵の食物も盗難にあった。誰もが必死に生きなければならなかった。分かち合うこと、それは特に難しい時でもあった。しかし将兵の帰還は一度に戦いの傷あとを埋め尽くしてゆくように私には思われた。列車は超満員で、皆はたすけ合って窓から出入りしていた。遅い国民なのだ。水郡線の駅には息子を待つて歳を取った母が涙をこらえて待っていてくれた。私たちはそこで、しっかりと抱き合った。

人も、国も苦しみを通じて良くなってゆくように、悲惨なことも多かったが、敗戦の結果、世界に冠たる現在の日本が創られたと思う。君は死んだのではない、ただいる所が変

わただけだ”と言ったロマン・ロランの言葉がしのばれる。良い人間の方が早く死んでゆくように考えられるからだ。赤坂の連隊跡はTBSのビルに変わり、青山の射撃場は区民の住宅地になった。私が通った桜町の学校にはいま、エレベーターもある。誰がこれらを予測できたであろうか。

先年パリでピクトル・ユゴーの家を訪れる機会があった。彼は百二十年も前に小説ジャン・バルジャンの最後の章に次のように述べている。

“人は生きてゆくうえに、愛し愛されることの他にはほとんど何もないのだ”

◆寺田 培(65歳)

私の軍隊体験

戦場・軍隊 ●

昭和十九年九月、神宮皇学館大学専門部を繰り上げ卒業した私は、特別甲種幹部候補第一期生(特甲幹第一期生)として翌十月、豊橋第一陸軍予備士官学校に入学した。わが国の敗色はもはや覆い難くなっていたが、真相を知らされないまま予備士官学校の門内に入った私は、陸軍将校を目指し身が引き締まるのを覚えた。配属されたのは歩兵生徒隊第二機関銃中隊第二区隊であった。早速厳しい訓練の八か月が始まった。

中学時代に右の鎖骨を二度も折っている私は、重機関銃が専門と聞かされ、名前を聞いただけでも重そうなのが、自分の右肩にずしりとのしかかることを思い、骨折を理由に一般小銃隊に配属を替えてもらえないだろうかと申し出た。学窓を出たばかりの私は、軍隊とは個人の自由のきかないところ、上官が決め、命令したことには生命をなげうってでも服従しなければならない、非情の世界であることを知らなかった。上官は即座に「寺田候補生には特に左肩で担ぐことを許す」といっただけであった。

私の申し出は一言のもとにはねつけられ、しかも最初から上官によくない印象を与えてしまったのである。軍隊というところは、上官から一度にらまれると、そのあたりは人事関係が続く限りつきまとう。私はこの一件のために、ことあるたびにしごかれることになった。例えば、馬の手入れについて講義があると、最初の実地訓練には決まって「寺田候補生」と呼ばれ、馬の手入れを命じられた。馬は馬なりに人の気持ちをよく知っているもので、馬に触れるのが生まれて初めてのを私を無視した。馬は暴れ、私はけられ、なすすべがなかった。豊橋も冬は寒い。馬の手入れは素手でやるので凍傷にかかり、それが崩れて右の薬指は骨があらわになるほどになった。

予備士官学校は高師ヶ原というところであって、あたり一帯が広大な練兵場であった。そこでは訓練に次ぐ訓練が行われ、徹底的にしごかれた。中学に入学以来、軍事教練は経験したが、歯を食いしばるほどのことはなかった。訓練が激しいのでよく腹が減り、いつもひもじい思いをした。それでも

私は耐えた。この辛さに耐え抜けば、将校になれるし、十か月の辛抱であった。仲間もみな同じ思いであった。

卒業まで外出は全くなかったし、面会日もほとんどなかった。ごく限られた日に面会にきて、会話の間にそつと食料品などをわが子に渡す親を何度も見た。また、あらかじめ時間と場所を示し合わせ、塀の外からわが子の存在を確かめて、握り飯などを投げ込む親の話も聞いた。親のない私はそんなことを見聞きするにつけ、たいへんうらやましい思いをした。

祖母タキは遠出のできる年齢ではなかった。だれも豊橋まで面会にきてくれる身内のいない私に、握り飯の包みをにぎらせたのは、山崎の叔父（八州夫）の家の番頭をしていた湯川権次郎さんであった。また、山崎の家をとりしきっていた古川実枝さん（私はオバと呼んでいた）は消化剤「わかもと」の中身を抜いたびんに、砂糖を混ぜた黄な粉（はったい粉）を詰め、葉のようにして送ってくれた。だれ一人、面会にきてくれる身内のいない私は、この二人に終生、筆舌ではいいつくせない感謝の念をもっている。

悲しくてもうれしくても、軍隊は人の前で涙をみせるところではなかった。日頃こらえていた涙は、夜、厩（うまや）当番のときに、とめどもなくあふれ出た。馬の手入れをしながら、満天の星空を仰ぎ、あるいは下弦の月を見上げては、ふと故郷を思い、亡き両親をしのび、思いがけない他人の愛情を知り、人知れず涙を流した。天皇陛下のために一身をささげ、

当時流行した言葉でいえば、「醜（みにく）の御櫓（みさぐさ）」になろうと、真剣に考えていた私もやはり人の子、年端もいかない青二才である。親のない子が涙を流せる場所は馬のそばしかなかったのである。

厳しい八か月間の教育に耐え抜いた私は、とうとう一度も豊橋の街をみることもなく、昭和二十年六月十日に豊橋第一陸軍予備士官学校を卒業した。私たちの第二機関銃中隊は卒業に際し『出陣之賦』という記念誌を発行した。記念誌といってもザラ半紙にガリ版刷り、B6判の手づくりで、表紙に「部外秘」とある。内容は生徒の詩歌や決意が主で、巻頭に区隊長などののはなむけの言葉、巻末に生徒の名簿がある。私はこの冊子に次の和歌一首と決意文を寄せた。当時考えていたことは、正直に申してこのとおりだったのである。

二重橋の御濠の石の片石となりても皇国を護り続けむ
大君に捧げ奉った武人の生命はあの天空に凝っては消え
る一沫の白い夏雲より尚軽く而も一介の身に余る限りな
く重いもの。畏くも上の□させ給へる深き□念感、国家
国民が熟願もって已まざる期待なり。我等特甲幹一期生
深く之を骨髓に体し一身を□□頭幽一貫の思想のもとに
唯々忠の一字に徹するのみなり。（□は判読不明）

私は卒業と同時に見習い士官となり、将校勤務をとり、直ちに普通寺師団司令部へ転属を命じられ、さらに丸亀補充隊の乗馬中隊預けとなった。将校集会所で食事ができる身分に

なった私は、「よく辛棒してここまでこれた」と感激新たなものがあつた。予備士官学校生徒の生活と見習士官としての連隊勤務とは乞食と王様の違いがあると思つた。当番兵はつくし、茶碗で食事ができるので、男子の本懐これに過ぎるものはない。私は当時の流行語であつた「悠久の大義」に生きようと真剣に考えた。

丸亀補充隊に一週間ほど勤務し、大阪師団司令部へ転属を命じられた。司令部は大阪城内にあり、上本町の現在の国立病院のところであつた第三部隊第二中隊勤務となつた。私は重機関銃が専門だが、しばらく一般小銃の第二中隊に配属されたのである。

そのうちに「護阪部隊」、つまりアメリカ軍が熊野灘から上陸し、北上して大阪へ進撃してくることを想定し、大阪平野で止めるという目的で「那智兵团」が新設され、連隊編成により私は第三大隊機関銃小隊長として転属を命じられた。連隊本部は大阪と和歌山の中間地点にある府立岸和田中学校に設けられた。母校であるから喜んで職員室にあいさつに行くと、私を知っている先生が「おまえはよく将校になって戻ってきたな」とびっくりしていた。担任の上野良一先生もまだ勤務しており、私をたいへん懐かしんでくださった。見習士官といえども将校勤務である。陸軍将校となつた卒業生は沢山いるが、母校に駐屯したのは私が初めて最後となつた。

部隊が駐屯するようになったのも、生徒が勤労働員などで学校にいないためだが、残っている先生方のために、私は食

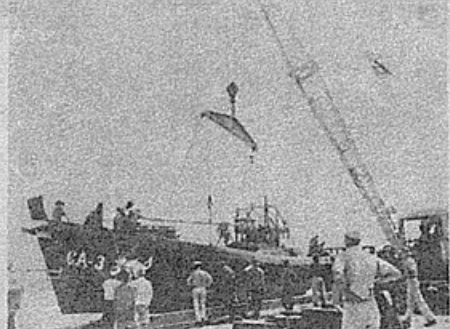
缶（食事を入れた缶）を職員室に運ばせた。校庭では新兵訓練が始まり、私の分担任は機関銃小隊長だが、訓練しようにも肝心の機関銃がなかった。兵隊も召集されたもので、下は十八歳から上は四十歳をすぎて小学校の校長をしているようなものまでおり、学歴もまちまちで全般的にばらつきがあつた。満足な訓練もできないで思案しているうちに八月十五日がきた。私は同日付で陸軍歩兵少尉に任官したが、日本の軍隊そのものがその日限りで消滅した。

孤兒院で涙の劇的再會

[illegible]

新装の漁船正に進水す

修理と新装備成つた漁船基地第三號漁船（元若丸）



巻の場漁 陸

[illegible]

欄庭家

・病院でお産の要

診療所 日本人医師

驅除藥心得

[illegible]

買物帳心得

いものものは一割から二割まで切ります

無窮に増える

たうん又ははクツは大

買物帳心得

レシコン、クツ、一割、二割、三割、四割、五割、六割、七割、八割、九割、十割、十一割、十二割、十三割、十四割、十五割、十六割、十七割、十八割、十九割、二十割、二十一割、二十二割、二十三割、二十四割、二十五割、二十六割、二十七割、二十八割、二十九割、三十割、三十一割、三十二割、三十三割、三十四割、三十五割、三十六割、三十七割、三十八割、三十九割、四十割、四十一割、四十二割、四十三割、四十四割、四十五割、四十六割、四十七割、四十八割、四十九割、五十割、五十一割、五十二割、五十三割、五十四割、五十五割、五十六割、五十七割、五十八割、五十九割、六十割、六十一割、六十二割、六十三割、六十四割、六十五割、六十六割、六十七割、六十八割、六十九割、七十割、七十一割、七十二割、七十三割、七十四割、七十五割、七十六割、七十七割、七十八割、七十九割、八十割、八十一割、八十二割、八十三割、八十四割、八十五割、八十六割、八十七割、八十八割、八十九割、九十割、九十一割、九十二割、九十三割、九十四割、九十五割、九十六割、九十七割、九十八割、九十九割、百割

一、此の本を讀つたらく

しかりしはいけません

二、此の本をせんければ

三、此の本をせん

一、クツを切り廻しては

二、クツを切り廻しては

三、クツを切り廻しては

四、クツを切り廻しては

五、クツを切り廻しては

六、クツを切り廻しては

七、クツを切り廻しては

八、クツを切り廻しては

九、クツを切り廻しては

十、クツを切り廻しては

十一、クツを切り廻しては

十二、クツを切り廻しては

十三、クツを切り廻しては

十四、クツを切り廻しては

十五、クツを切り廻しては

十六、クツを切り廻しては

十七、クツを切り廻しては

十八、クツを切り廻しては

十九、クツを切り廻しては

二十、クツを切り廻しては

二十一、クツを切り廻しては

二十二、クツを切り廻しては

二十三、クツを切り廻しては

二十四、クツを切り廻しては

二十五、クツを切り廻しては

二十六、クツを切り廻しては

二十七、クツを切り廻しては

二十八、クツを切り廻しては

二十九、クツを切り廻しては

三十、クツを切り廻しては

三十一、クツを切り廻しては

三十二、クツを切り廻しては

三十三、クツを切り廻しては

三十四、クツを切り廻しては

三十五、クツを切り廻しては

三十六、クツを切り廻しては

三十七、クツを切り廻しては

三十八、クツを切り廻しては

三十九、クツを切り廻しては

四十、クツを切り廻しては

四十一、クツを切り廻しては

四十二、クツを切り廻しては

四十三、クツを切り廻しては

四十四、クツを切り廻しては

四十五、クツを切り廻しては

四十六、クツを切り廻しては

四十七、クツを切り廻しては

四十八、クツを切り廻しては

四十九、クツを切り廻しては

五十、クツを切り廻しては

五十一、クツを切り廻しては

五十二、クツを切り廻しては

五十三、クツを切り廻しては

五十四、クツを切り廻しては

五十五、クツを切り廻しては

五十六、クツを切り廻しては

五十七、クツを切り廻しては

五十八、クツを切り廻しては

五十九、クツを切り廻しては

六十、クツを切り廻しては

六十一、クツを切り廻しては

六十二、クツを切り廻しては

六十三、クツを切り廻しては

六十四、クツを切り廻しては

六十五、クツを切り廻しては

六十六、クツを切り廻しては

六十七、クツを切り廻しては

六十八、クツを切り廻しては

六十九、クツを切り廻しては

七十、クツを切り廻しては

七十一、クツを切り廻しては

七十二、クツを切り廻しては

七十三、クツを切り廻しては

七十四、クツを切り廻しては

七十五、クツを切り廻しては

七十六、クツを切り廻しては

七十七、クツを切り廻しては

七十八、クツを切り廻しては

七十九、クツを切り廻しては

八十、クツを切り廻しては

八十一、クツを切り廻しては

八十二、クツを切り廻しては

八十三、クツを切り廻しては

八十四、クツを切り廻しては

八十五、クツを切り廻しては

八十六、クツを切り廻しては

八十七、クツを切り廻しては

八十八、クツを切り廻しては

八十九、クツを切り廻しては

九十、クツを切り廻しては

九十一、クツを切り廻しては

九十二、クツを切り廻しては

九十三、クツを切り廻しては

九十四、クツを切り廻しては

九十五、クツを切り廻しては

九十六、クツを切り廻しては

九十七、クツを切り廻しては

九十八、クツを切り廻しては

九十九、クツを切り廻しては

百、クツを切り廻しては

[illegible]

◆中谷 静雄（65歳）

終戦は敗戦だった——日章旗焼却命令がであの日の思い出——

戦場・軍隊 ●

私のささやかな戦争体験

昭和二十年八月十五日、私もまた兵役にあった。第三乙種の予備役から召集で入隊したのがその年の二月二十日、目黒区大橋で、近衛師団から編成された範三八三一部隊である。

この部隊は、賀陽宮殿下を師団長に戴き、近衛部隊唯一の輓馬中隊で、輓重輸卒が兵隊ならば、蝶々といはれぬ鳥うち、あの輓重兵で、隣の自動車中隊の存在がうらやましくてならなかったが、上官や古参兵は、「畏くも宮殿下を戴く近衛部隊唯一の輓馬中隊だ。誇りに思え」と、千代田の宮居みどりなる連隊歌とともに、盛んに「名誉」を煽っていた。

そんなある晩、突然、「初年兵集合、外に出よ」と、営庭外に引率され、防空壕に押し込められるや閃光と炸裂音と地響きの一夜を過ごした。

翌早曉、焼け残った営内に引き戻されて、「貴様はどこか。麻布森元町か」「全滅だ。状況は後で知らせる」。これが、現港区の相当部分の被災した五月二十四日深夜の大空襲の私にとっての第一報であり、全てであった。

空襲の翌々日、私共、〃ものの役に立ちそうもない初年兵〃は、戦争末期の信じられないような装備（三八式歩兵銃、一装、二装、三装、編上靴。長靴まで支給されていた）と、どこから出て来たのか、その頃としては珍しい米、缶詰、雑穀、塩鮭etc.と一緒に、わが隊の車両と貨物列車で、房総半島中部の菅田村に送られ、東光寺という古刹を中心とする地域に駐屯することになった。この移動中焼野が原は見たものの死者や負傷者を一人も目にしなかったのは不思議でならない。

移駐と同時に、元来、虚弱な私は練兵、休を命じられて内務班勤務となり、一期の検閲も見送らざるを得なかった。

その間、東京湾越しに見た五月二十五日のあの空襲は、あまりの凄絶さに思考力もどこえやら、ただ茫然と眺めていた記憶しかない。

そして六月、硫黄島ではわれわれ部隊の前部隊長、栗林中將の率いる部隊が全滅し、二十三日には沖繩が陥落した。沖繩の落ちた数日後、私は長野県松本陸軍病院に入院を命じら

れた。収容力、治療手段、食料も乏しい本院から敬遠されたわれわれは松本を素通りして、浅間温泉群の一角の藤井温泉に収容された。さしたる日課とてなく、薄い粥をすすり、適当に温泉に浸り、付近を散策して時を過ごしたが、私には引き続き内務班の補助作業が課せられ、農村出らしい四十がらみの温厚な伍長（だったか軍曹）のもとでそれなりの日々を過ごしていた。

焼け出されて北鎌倉に疎開中の母が得難い列車の切符を手に入れ、配給品の中から貴重な食料の一部を持参してくれ、三月十日、五月二十七日のわが家と周辺の被災状況などを語ってくれた。「十番の銭湯（今の親水公園のところ）付近では（畳）一帖に三本か四本の割で油脂焼夷弾が落とされ、直立姿勢が少しでも崩れていたら直撃だったろう」と避難當時を語り、「日比谷へ出る途中（一時、数奇屋橋の阪急ビルそばのビルに仮寓）金杉橋で（市電の）電線に人の首が（恐らく爆風で飛ばされたのであろう）引っ掛っていた」と、その恐怖を語っていたのを覚えている。

八月十五日は宿舍の二階の広間に集められ、あの聞き取り難い玉音放送を旅館の粗末な真空管式ラジオで聞いた。しかし、その放送が「終戦の詔勅」であることは、夕食の際の彼の伍長の淡々とした解説で初めて知った。それ故に、私には玉音放送による直接の感動は何もなく、温和で順朴な滋味あふれる伍長殿の人柄で純化されたレポートによって極く自然に終戦の悲劇が受け入れられたと感謝している。

八月十六日、私にも米軍による武装解除のための原隊復帰の、といっても千葉県菅田村の駐屯地へ戻るべく、命令が伝達された。そこで、そのまま召集解除になる兵隊もあつたようであつたが、大半は原隊に戻って行つた。

八月十七日、軍に関係する一切の物品の焼却の命令が出た。とうに食べつくされて金魚一匹いない泉水跡でそれらを焼却することになり、私にその任務が当つた。歩兵操典、馬事提要、軍人勅諭、奉公袋、日章旗、日記帳などもあつた。鍵型に配置された建物の中庭での作業は衆人環視であつて、火の通らない日章旗を棒の先きに持ち上げメラメラと広がる炎に「やめろ、やめんか、こらっ」と怒鳴られた声は今も耳の底に残っている。あの一枚の日の丸には、歴戦の勇士の青春の喜怒哀楽が凝集していたのであろう。仕方のない処置ではあつたがむごい一瞬であつた。

あの一瞬を思うと、昭和二十年八月十五日は、終戦記念日ではなくて、私には敗戦記念日であつた。戦争は自動的に終わったのではなく他動的に結末を迎えたのである。筆舌に尽くせない犠牲を払って迎えた敗戦記念日である。残念ながらわれわれ自らの自由意志で打てた終止符でなかった事實は、謙虚に深く反省したいと思う。次の世代の人達へも、この点は、なぜそうならなければならなかったか、結果ではなく、原点に立ち戻つてよく理解してもらいたいと思う。

日本の第二次世界大戦の歴史的事実は決して風化させたくないと思う。

◆長谷川 豊（79歳）

日本の軍隊と戦争責任

戦場・軍隊 ●

明治憲法下では、男子に兵役の義務があった。満二十歳の年に徴兵検査を行ない、甲乙丙丁に区別した。丁は主に身体障害者で不合格。甲乙丙は合格で、軍務に服す義務があった。甲と第一乙の一部は、現役兵として入隊し、陸軍は二年、海軍は三年の軍務に服した。

昭和六年満洲事件、さらに十二年日支事変を起こした軍部は、現役兵だけでは不足で、現役兵を終えていた者、第一乙の未入隊者、第二乙も召集して、中国大陸に送った。

日支事変終結の見込みもなしに、十六年十二月八日太平洋戦争を開始した。戦火は南方各地に拡大し、北満（中国東北部）では、ソ連に対抗のため関東軍の増強に迫られた。このため、在学中は徴兵検査の延期が出来ていた学生も、十八年秋から理科系を除いて、徴兵検査を経て在学中に入隊させて、戦線へ送った。これを学徒出陣と称した。

一方、これまで召集しなかった丙種の者も十八年末から召集するようになった。丙種で召集された者は、当然年輩者が多かった。私もそのひとりで、三三歳で十九年六月十五日、

仙台の野砲隊に入隊した。入隊した日「お前たちの被服は天皇陛下から御下賜になったものだ」「上官の命令は天皇陛下の命令である」などといわれた。そして、毎晩、いっしょに入隊した者とともに、十歳以上年下のいわゆる上官から殴られていた。

日本の軍隊では、社会的地位、特殊な才能も年齢も問題にならなかった。軍の階級だけが物をいい、上官の命令だけが支配し、暴力は日常茶飯事であった。このような、暴力的大量集団の非人間的社会は、世界的にまれなのではなかろうか。

私のいた部隊には、一週間に一回召集兵が入隊し、一週間後に外地へ出発していた。私は外地へ派遣されずに四ヶ月経過したが、十月末に外地行きが内定した。十月から私は中隊事務室勤務だったので、内定を早く知りえた。ところが、外地行き前日、正式名簿に私の名前がない。私は員数外になったのだ。員数外は軍隊言葉で、定員外のことである。さらに、員数外なので、明日召集解除だという。夢かと思うばか

りの驚きの連続であった。なぜなのか。これは私にとって永遠の謎である。外地はフィリピンだったので、員数内なら私の骨はフィリピンの山中に埋もれているだろう。

召集解除で、十九年十一月一日仙台からの帰途、宇都宮を過ぎたあたりで、急に空襲警報が鳴り、汽車は停車した。上空遙かかなたに銀翼一機が見えたが、間もなく視界から消えた。これは、東京を偵察して航空写真を撮った米軍B29機の第一号だったのだ。その後、米軍は何回も偵察を行い、準備を整えて、日本各地を何回も空襲するようになった。東京の大空襲は、二十年三月十日、それに五月二十五日だろうか。

我家は五月二十五日、目黒区下目黒八丁目（現青葉台）で、爆撃されて焼失した。焼夷弾が近くに何発も落ちたが、我家は直撃を免れて、家族に人的被害がなかったのは不幸中の幸いであった。焼夷弾の落下音はヒュー、ヒュー、ヒュー、という異様な響きで、これは経験者にしか判らないだろう。

すでに、前年に日本の同盟国イタリアは敗退し、五月初めにはドイツが降伏し、日本だけが残っていた。五月には米軍が沖縄に上陸し、日本の領土で始めての地上戦が行なわれ、六月には米軍が沖縄を制圧してしまった。それでもまだ頑張っていた日本に、七月二十六日英、米、中国の首脳は、ポツダム宣言で日本に降伏を迫った。日本はこれに応ぜず、米軍は広島と長崎に原爆を投下し、ソ連が参戦して、ようやく日本は宣言を受諾した。

満洲事変開始の時私は二十歳で、太平洋戦争の終結時には三十四歳になっていた。この十五年戦争に、国民は「国のために」「天皇陛下のために」といわれて、従って来た。

戦争は軍が行ったというが、軍人勅諭に「朕は汝等軍人の大元帥なるぞ」とある。大元帥は軍の最高位なのではなからうか。国や軍の重要事項は「御前会議」で決定されていた。日本の侵略戦争は、東京裁判で裁かれたはずだ。しかし、天皇は東京裁判で裁かれなかった。

戦後の歴代内閣は、侵略戦争の責任を明確にせず、戦犯だった人が首相になったりした。靖国神社問題や教科書問題が、内外の批判を浴びるのは、侵略戦争に対する反省が不徹底だからだと思う。この根源は、天皇の戦争責任が曖昧にされて来たからではなからうか。

幾百万の戦死傷者、とくに広島と長崎の原爆被害者に対し、軍隊では員数外で外地行きを免れ、家は焼かれても傷ひとつ負わずに七十九歳まで生き長らえて来た私である。だが、いついかなることがあるかもしれぬ年齢で、いまま入院中である。天皇の戦争責任を、本島等長崎市長は、公人として述べられたが、私は私人として、同じことを述べておきたいと思う。

◆長谷川 豊（79歳）

私の昭和二十年八月十五日と「魔の四日間」

—— 戦場・軍隊 ●

昭和二十年八月十五日、私は二度目の召集で千葉県九十九里浜南端にいた。部隊は七月下旬臨時編成の野砲隊で、一中隊に野砲一門が配置されていた。砲の移動には屈強な馬六頭が必要なのに、馬は一頭も配置されず、兵隊が砲に綱をつけて引っぱっていた。兵隊には帯剣の支給がなかった。古年兵は「軍馬のいない野砲隊！丸腰の兵隊！」と自嘲していた。敗戦直前を象徴した日本軍隊の姿だった。

八月十五日午前中、野砲を樹の葉で被い、砲身を水平にして、上陸しようとする敵を近距離で撃つ構えを整えていた。やがて、正午にラジオ屋の前に集合させられた。

正午の「玉音放送」は、雑音が多くて聞きとりにくかったが、私には天皇自ら敗戦を告知したことがわかった。私は、これで軍隊から解放される、という喜びでいっぱいであった。

放送終了後、宿舍の小学校に帰って昼食。そこで、班の専任兵長が「おい、長谷川！お前は学問があるから聞かすが、天皇陛下はわしらを激励されたんだろうな」といった。私は

「日本は敗けたんです」とずばり答えた。兵長は「なんだと、この野郎！」と私の方へ来かけた。昼食中、中庭をへだてた建物にある教員室に、うなだれたり、泣きながら来る教師らしい人の姿を見ていた私は、兵長にあの先生方に聞いて下さいといった。兵長は教員室へ行き、やがて戻って来て、自分の頬を殴りつけて、悔しがった。これで、敗戦の告知か激励か、半信半疑の者にも、敗戦という重要な事態がのみこめたと思った。

午後の行動予定はなく、三々五々帰郷出来る喜びと日本の将来についての不安を、ひそひそ話していた。ここの兵隊は、毎日昼間米軍グラマン機が低空で飛び、夜は米軍B29爆撃機の編隊が低空で来て、ここから高度を上げて、日本各地へ爆撃に行く姿だけを知っていた。しかし、英、米、中国の首脳が、日本に降伏条件を突きつけた七月二十六日のポツダム宣言、八月六日世界で初めて米国の広島への原爆投下、八月八日ソ連の参戦、八月九日再び米軍の長崎への原爆投下。以上について、ここの兵隊は新聞は読めず、ラジオも聞けな

い状態だったので、知るよしもなかった。だから「玉音放送」は寝耳に水だったのだ。

小学校には浴室がないので、兵隊は三人一組で、農家へ「もらい湯」に出掛けていた。私が厄介^{やっかい}になった家の次男は戦死し、長男は消息不明だった。十五日夜もこの家へ出かけた。家に近づく、夏なので戸や障子は開けたままの広間で、夫婦が仏壇に向って念仏を唱えている姿が見えた。三人は暗黙のうちに、この夜の「もらい湯」を中止した。

私はこの夜、夜半一時から朝五時まで、後半夜の不寝番であつた。戦争は終わったので、のんびりした気分、裸になっている若い兵隊が、寝冷えしないように、スフ入りごわごわの毛布を掛けてやりたりしていた。一時に前半夜の不寝番と交代した時から、ひとりの古年兵が不在で、トイレかと思っていたが、二時になっても帰らない。いささか不安になっていた矢先、忍び足で帰って来た古年兵は、私に両手を合わせて深ぶかと礼をした。彼には「もらい湯」先で親しんだ女性がいる、間もなく帰郷する身になったこの夜、たっぷり馴染みを重ねて来たことが、あとで判った。このようにして、私の昭和二十年八月十五日は終りを告げた。

七月二十六日ポツダム宣言を突きつけられてから、その受諾まで二十日もかかってしまった。八月九日二度目の原爆が長崎に投下されて、初めてその夜に「御前会議」が開かれて、宣言受諾が決定したのだという。だが、軍部の強い抵抗があつて、各国に宣言受諾の通告ができなかったらしい。よ

うやく、八月十四日の「御前会議」で、宣言受諾が最終的に決定し、直ちに各国へ打電したものと思われる。私がこう考える根拠は次の通りである。すでに述べたように、この地方には連日昼間米軍グラマン機が飛びかっていたのに、八月十五日は早朝から一機も、その姿を見せなかったのだ。つまり、米軍には、十五日にはその必要がなかったからだ。

相手国には十四日に通告し、同日国内では報道機関にだけ知らせていたようだ。十五日は新聞の朝刊は宣言受諾のせたが、配達と販売は午後一時まで禁止し、NHKは正午の「玉音放送」だけを報道させていた、とのことだ。結局、一般の国民や兵隊は実態を知らされなかったのであつた。

もし、ポツダム宣言の受諾が八月五日までに行われていれば、広島と長崎への原爆投下という惨事はなく、ソ連の参戦もなく、したがって日本兵六十万人余のシベリア抑留はなく、中国残留孤児も少数ですんだであろう。八月六日から九日までは、わずか四日間なのに「魔の四日間」になってしまった。そして、この四日間は永遠に取り戻せない。それは、全知全能の神様にも不可能なことである。

◆花田 四郎(77歳)

部隊玉砕の将兵を悼む

戦場・軍隊 ●

昭和二十年八月十八日、中部太平洋パラオ本島の照集団(第一四師団を基幹とし独混第四九旅団第五三旅団の部隊集団。秘匿名を照部隊といった)本部から、突然パラオ本島ガラスマオ地区守備の各部隊中隊長以上に地区集会所に集合が令された。何事ならんとかけつけた私も砲兵中隊長として出席したが、十数人の出席者一様にげんなり面持ちであった。定刻になり出席した集団本部幹部から戦争が終わったこと、将兵を無事故国につれて帰ることが陛下のお諭しであることが伝達された。その瞬間茫然自失、大きな衝撃が頭をたたき、滂沱たる涙止まる事をしらず、色々な想いが走馬燈のように脳裡を走った。この二、三日、米軍機の飛来が少なくやけに静かな日々であった事が頷かれた。陛下の終戦放送があった日から三日後の事であった。

戦に負けた。くやしい。これからの日本はどうなる。靖国神社で会おうの合い言葉でつながった戦没者の英霊は。国のため全てを捧げて闘った部隊玉砕の将兵達は。同じパラオ環礁内の隣の島ベリリュウ島では、同じ照集団の将兵が終戦の九ヶ月前に陸海軍合せて一万五百余名が逆上陸部隊共々と数

倍に優勢な米軍の二ヶ月にわたる上陸戦闘で玉砕している。

走馬燈は尚走る。玉砕戦闘の悲劇は数々ある。特に住民を巻き込んだ沖縄の悲劇は忘れてはならない、語り伝えなければならない。

各地の玉砕部隊はその場所と名をあげるだけでも左記のように数々ある。

記

一 北部太平洋アリウシャン列島のアツ島

(1) 玉砕時期 昭和十八年五月

山崎部隊長以下将兵二、七五〇名全員玉砕

二 濠北地区西部ニューギニアのピアク島

(1) 玉砕時期 昭和十九年七月

陸軍・第三六師団歩兵第二二連隊葛目直幸大佐

指揮の葛目支隊とその配属部隊

兵力 九〇九四名

海軍・第二八根拠地隊司令官千田貞敏少将

指揮の兵力二、二〇〇名

合計 一一、二九四名

米軍陸海空支援の優勢な敵と二ヶ月にわたる激戦の末玉砕す

三 中部太平洋ミクロネシア海域の島々

サイパン島

テニアン島

グアム島

以上三島玉砕時期 昭和十九年七月

(1) サイパン島兵力

第三一軍軍司令官小畑英良中将指揮下

四三師団は海上輸送途中に海没のため半減、歩第一一八連隊長伊藤大佐 歩第一三五連隊

歩第一三六連隊 二九師団歩第一八連隊海没のため生残者サイパン島

(2) テニアン島兵力

二九師団歩第五〇連隊 山砲第二九連隊の一部
海軍と共で約一万人

(3) グアム島兵力

第二九師団長高品中将指揮

歩第三八連隊長末長大佐 山砲第二九連隊主力 四三

師団、二九師団共に海上輸送途中の海没にて半減

三島共昭和十九年六月より七月にわたる米陸海空軍との激戦にて玉砕す

(4) パラオ環礁内ベリリュウ島

玉砕時期 昭和十九年十一月

陸軍・第一四師団歩兵第二連隊中川洲男大佐指揮の兵力六一九二名

激戦中パラオ本島より敵の背後に逆上陸の歩兵第一五連隊第二大隊の将兵六〇〇名余

海軍・大谷竜蔵大佐指揮の三六四六名

合計 一万五百名余

九月より十一月の約二ヶ月にわたり激戦を続けたが全員玉砕す

四 小笠原諸島の硫黄島

(1) 玉砕時期 昭和二十年三月

陸軍・小笠原兵団長栗林忠道中将指揮す

一五、五〇〇名

海軍・海軍部隊七、五〇〇名

合計 二万三、〇〇〇名玉砕す

以上各所で部隊玉砕した多数の将兵に対し、悲痛の感に耐えない。何をすれば冥福をお与える事が出来るだろうか。ご遺族の安否はいかがなっているだろうか。国民感情からいってせめてもの心尽しとして、英霊のたむろしている靖国神社、戦没者墓苑、各地の護国神社の祭祀は国家行事として護持していただきたい。この事は終戦に当り身にしみて痛感した事で、生還した者の務めとして声を大にして要望する。集会所に集められた者一同しばらくたつたが誰一人として席を立とうとしない思い詰めた姿勢のままのひとときが続いている。終戦体験の一駒である。

◆春山 巖雄（69歳）

雨中の撤退、「タコ」が今でも両足に――

戦場・軍隊 ●

私は先の戦争であの悲惨であった「インパール作戦」に参加した。そして一生懸命お国のためと頑張ったが敗れてしまった。日本軍の損害は大きかった。あの作戦は攻撃時はそれほど損害はなかったが、転戦命令（即ち撤退命令）を受けてからの損害が大きく、その間私も多くの戦友を亡くした。改めてあの撤退時の苦しみ、数ある中の一つ、私事ですが記してみる。

雨中の撤退

ミャンマー（旧ビルマ）とインドの国境は、すっかり雨季に入っていた。この地域の降雨量は年間八、〇〇〇から一、〇〇〇ミリという想像に絶する量で、日本内地の量に比較すると四―五倍の雨が五月から八月まで然も終日猛威をふるうのである。当時アラカン山脈は連日愁雨に煙って、どしゃ降りだった。そんなアラカン山中を東へ東へと、四カ月前まで攻撃に使っていた道路を逆に撤退していた。前身濡れたまま衣服は乾く暇はなかった。乾かすことの出来ない毎日であった。そのような状況下にあったため、寸時の休憩も山の中

が多く、空襲に備えて着のみのまま軍靴もはいたままの日が続いた。この軍靴にまつわる話をしよう。

普通、休憩をする時は、靴をぬいだ方が疲れが取れるというが、その当時の理由によって靴がぬげなかったのである。というのは、連日雨の中を歩き続けていたので、靴の中まで雨水が入り、その雨水のために足がふやけて大きくなり、しかもやわらかくなってしまう、一旦靴をぬぐと、寸時にして靴の皮が体温から離れるので、靴自体がちぢまって小さくなる。そんなことで、ふやけて大きくなった足が、今度は靴の中に入らなくなる。要するに一旦靴をぬぐと靴がはけなくなる。それが怖しくて靴は、はいたまま休憩したのである。

そんなわけで足の裏は親指の腹の部分と、土踏まずの両側、すなわち歩くのに一番力が入る所が破れて両方の足計六カ所の部分に痛みが生じた。それでも当時としては靴をはいている者、靴を持っている者は最高の雄姿であった。その内足の裏が、ちくちくと痛みが増して来たのでよく見ると軍靴

◆春山 巖雄（69歳）

悲しい思い出（戦友の自殺）

戦場・軍隊 ●

先の戦争中、昭和十九年三月から開始したインパール作戦中の話である。戦争体験の中で忘れることのできない話は山ほどあるが、これもその内の一つだ。この作戦も、すでに末期症状になつての転戦指令、「モールメンに集結せよ」という命令を受けてから、どの位の日数が過ぎたか判然としないが、あのインパール平野から、そしてアラカン山ろくから、雨に打たれ、食糧もなく、追いかけてくる敵さんを尻目に撤退を続けていた。病人もいた、少し頭がおかしくなつた者もいた。ここまで撤退すればもう安全だ、助かつたのだという地域まで、あと何月この撤退が続くのだろう、そんな事を考えながら、分隊九名という少数行動であつた。

その内一人の戦友が二、三日前から体調が悪いと言ひ出し、食べることも駄目になつた。そして日に何回となく便のたれ流し、アメーバーセキリにかかつてしまったのである。手当の仕様もなく、そのまま撤退を続けていたがこのアメーバー氏のため他隊と三、四日遅れての撤退行動であつた。唯、このアメーバー氏、歩行に困難がともなつていたが、気

力は充分で休息後移動開始という時になると、大声でそのたびに「連れていってくれ」とさけぶので、他隊との遅れを取り戻すため、担架で運ぶことになり、戦友達の手で特製の担架を考え出した。今までも移動中に何回となく便をするので、その時間を省くため、担架に乗つたまま用を足せるようにと、その装置をつけた特製の担架であつた。

しかしこの装置がよかつたのか悪かつたのか、以来アメーバー氏は担架の上で寝た切りになつてしまつた。そして半月位過ぎた。ある日このアメーバー氏「ここが痛い、あつちが痛い」と言い出し、特に背中を指差して痛い、痛いと言うのでその背中を見て驚いた、俗に言う、床ずれが出来ており、よく見たら真黒になつた背中の一カ所に、親指大の穴があいていた。もちろん脱脂綿などない。手当といへば、身体にはいつくばっている蠅^{はえ}を追ひ払う位の手当しか出来ない情況下であつた。その内アメーバー氏口をきかなくなつてしまつた。それに比例して背中^{はえ}の穴も大きくなって、その傷口からとうとう背中の骨が見え始めた。そしてまた驚いた。その穴

の奥の方で何かが、うごめいている。明るい場所まで運んでその穴をのぞいたら、モク、モクと数え切れない程のウジ虫である。担架にて撤退している内に化膿した肉体を蠅がご馳走になり、子孫を増やすために卵を生みつけ、数日にしてこのウジ虫になったのである。骨の回りを占領しているウジ虫にはどうしようもなかった。ただ這い出してくる虫を殺す位で、背中の穴の中まではとても退治できる数ではなかった。

可愛相であったが敵さんから一步でも遠くへ運ぶのが精一杯であった。数日後ジャングルの中で大休止をすることになった。疲れた体をお互いにかばいあつて目を閉じた。どの位の時間が過ぎたか判然としないが「ドカーン」という音で目を開けたが、この「ドカーン」というのはその頃流行していた。「あ、また誰かやったな」と思いながら担架を見たら、アメンバー氏の姿がない。ハッと思つてジャングルの中へ入つて見た。何も残っていない。ただ左手首と巻きつけてあつた腕時計のみでありアメンバー氏は手榴弾を抱いてしまつた。それにしてもよくここまで這い出したなあと思つた。当時我々が多い人で三発、少ない人でも一発、大事にして持っていたのは手榴弾であつた。あのアメンバー氏、その一発を最後として使用したのである。悲しい出来事であつたが当時としては致し方なく、誰も責める事は出来なかつた。

あの雨の中の撤退では、栄養失調に加えて疲労の連続で、全員が大なり、小なりの病氣を持っていたのは確かである。死は易く、生きる事の難儀、苦境に続く苦境の中で、少し酷

のようであるが、あのような状況の中で、病氣に負けた者のみが、アラカンの露と消えて行つたのであつた。私達も、もう必要以上に他に手を貸してやるという行動にも限界があつた。しかしあの当時、我々は一人の戦友に最後の最後まで手を貸す事が出来なかつたのは誠に残念でならなかつた。心から冥福を祈るものである。インパール作戦中の話だつた。

